



夢はバラ色

「世界適塾構想」 ～大阪大学のグローバル人材育成戦略～

東 島 清*

World Tekijuku

Key Words : World Tekijuku, SGU

はじめに

世界の人口増加が続きグローバル化が進行する中、少子高齢化が急速に進行する日本の舵取りは難しい局面を迎えている。日本はグローバル社会の中でどのような地位を占めようとするのか、それにより大学も含む教育制度の在り方も大きく変わる。団塊ジュニアの子供世代により18歳人口の減少も一息ついていたが、2018年から再び急速な減少に転じる。周りの国々が急速に経済成長を遂げる中、日本の産業構造も次第に変化している。

かつて日本が先進国に追いつくことを目標に高度経済成長を遂げていた時代には、大学は一定の選抜機能を備え粒のそろった卒業生を大量に社会に送り出すことを求められていた。自ら新たな知識・技術を開拓しさまざまな社会的・技術的課題を世界に先駆けて解決することが求められるこれからの日本では、粒のそろった人材よりも各人が様々な専門性を持ち、かつ他分野の人々と協働して課題に取り組むことができるような人が求められる。サッカーで言えば、各選手がフィジカルに強く各ポジションにおいてそれぞれ自分の役割をしっかりと果たしながら、ほかの選手たちと連携したプレーをすることができるチームが求められるのに例えることができる。

世界適塾構想

大阪大学では、それぞれの分野で高い専門性を持ち、他分野の人と協力しながら新たな課題を発見し解決するために必要な高度汎用力を備えた人材を世界に送り出すことを目指している。そのような人材を育成するために、カリキュラムや授業方法の改革、グローバル化を目指すクォーター制などの制度改革、知識・技能だけでなく主体性・協働性を持つ学生を受け入れるための入試改革など、さまざまな教育改革を行うことにしている。大阪大学の前身である適塾には、日本中から志を持った若者が集まり、適塾で切磋琢磨したのち、また日本中に散らばり多くのひと々と協働しながら明治維新を支えたという歴史がある。今度は世界中から志を持つ若者が集まり、大阪大学で切磋琢磨したあと、また世界中に散らばり、世界中の人々と協力しながらこのグローバル社会が抱える複雑で困難な課題に挑戦し解決できるような人を育てたいという願いから、新たな教育改革を世界適塾構想と呼んでいる。以下にそのいくつかの取り組みを紹介する。

次世代型人材育成に向けた教育プラットフォームの構築

「知の統合学修体系の構築」

それぞれの専門分野における体系的学修や研究・研究体験で獲得した専門性を更に深め、体得した専門性を「社会的価値の創造」につなげるため、専門には依存しないイノベーションを起こす問題解決の方法論やスキルを副専攻・副プログラムとして提供する「コラボレーティブイノベーションセンター」を設置し、知と社会の統合を行うことができる人材育成のプログラムを開発する。また、知と知の統合を行い新しい異分野統合・新学術領域開拓を行う「世界適塾大学院」を平成30年に設立し、世界をリー



* Kiyoshi HIGASHIJIMA

1948年1月生
京都大学大学院理学研究科博士課程中退
(1974年)
現在、大阪大学 理事・副学長
理学博士 理論物理学(素粒子論)
TEL: 06-6879-7002
FAX: 06-6879-7007
E-mail: higashij@phys.sci.osaka-u.ac.jp

ドする卓越した次世代研究者の育成を目指す。

スーパーグローバル大学

文部科学省は我が国の高等教育の国際競争力の向上を目的に、海外の卓越した大学との連携や大学改革により徹底した国際化を進める、世界レベルの教育研究を行うトップ大学や国際化を牽引するグローバル大学に対し、制度改革と組み合わせ重点支援を行うことを目的として、昨年度からスーパーグローバル大学創成支援事業を開始した。大阪大学も世界適塾構想を掲げてこの事業に申請し、他の12大学とともに世界大学ランキングトップ100を目指す力のある世界レベルの教育研究を行うトップ大学に指定された。

留学生の受け入れ

世界適塾となるには世界中から志を持つ優秀な人材を集める必要がある。現在大阪大学に学ぶ留学生は学部で4%、大学院で15%であるが、平成32年度までに学部で8%、大学院で25%の留学生比率にすることを目指している。そのために海外における留学生選抜や、英語だけで卒業できるコースの増設などを行っている。また、学部から大阪大学に正規性として留学する学生の多くは日本企業への就職を希望しており、海外の高校卒業時期と日本の大学入学時期に半年間の差があることを利用して、大阪大学入学前の半年間に日本語の集中授業を行うことにしている。また、最先端の研究を展開している外国人研究者と大阪大学の研究者の共同研究を支援するために、国際共同研究促進プログラム（国際ジョイントラボ）を設け海外31拠点の外国人教員をクロスアポイントメント制度により大阪大学で雇用している。

大阪大学学生の海外派遣

内向き傾向が強いといわれる日本人学生にもできるだけ早い段階で海外を体験させるために、初年時の語学研修、2-3年次の海外の大学で行われるサマープログラムへの参加、さらに長期間の留学の3段階の留学プログラムを考えているが、語学研修を除き英語運用能力の強化と夏季休暇を欧米圏などの海外大学と一致させる必要がある。平成29年度からは、4月-6月中旬の春学期、6月下旬-8月の

夏期講習期間、9月-11月の秋学期、12月-2月の冬学期からなるクォーター制（3学期および夏期講習期間）を実施する予定であり、夏期講習期間に海外の大学で開催されるさまざまなサマープログラムに参加することができるようになる。また、昨年12月にカルフォルニア大学（UC）の大阪大学オフィスを開設し、UCとの学生の相互交流が行われるようになり、大阪大学においても短期留学生向けのサマープログラムを開設する予定である。

留学生と日本人学生が切磋琢磨するキャンパス

留学生と日本人学生がともに生活するグローバルビレッジを建設し平成31年から運用を開始する予定。大阪大学では1年生全員と2年生の希望者にTOEFL-ITPを受験させている。アメリカの大学に留学するには、このテストで550点以上をとることが要求される（正式にはTOEFL-iBTで80点以上）。アメリカ東部の有名大学では600点を要求するところもある。今年から大幅に増やした実践英語（上級）は520点以上の学生を対象にネイティブの英語教員による授業で550点を目指している。大阪大学では留学生向けの英語による授業を日本人学生にも提供しており、550点に達した学生は英語による授業を受けることにより、大阪大学にいながら留学生と一緒に授業を受ける学内留学に位置付けることができる。また、先にあげた大阪大学で開校予定のサマープログラムに参加することも国内留学と考えることができる。ここで授業を受けて合格することができれば、海外の大学に正式に留学しても十分にやってゆけるだろう。ただし、次に述べるアクティブ・ラーニングの態度を身につけておく必要がある。

アクティブ・ラーニングの導入

アメリカなどでは対話型授業を多く導入しており、学生は多くのアサインメントを主体的に学ぶ環境が整っているが、日本では多くの授業がまだ講義スタイルで行われており、もっと授業外学習を増やしていわゆるアクティブ・ラーニングへの転換をする必要があるが、そのような教育を受けたことのない教員に新たな教授法を体験してもらうために、教育学習支援センター（TLSC）を設け教員向けの研修会を頻繁に開催している。次に述べる世界適塾入試の開始に合わせて、平成29年度からアクティブ・ラ

ーニングを重視した新カリキュラムを開始する。また今年度から学部学生の自主研究支援事業を新たに設け、学部低学年から自ら見つけた課題を探究する自主研究を推奨している。毎年、文部科学省主催で行われる理工系学部学生の自主研究の全国コンテストであるサイエンス・インカレでは、大阪大学の学生が最も多く受賞しているが、理工系だけでなく文系にも自ら探究する態度を育てるためのプログラムである。

世界適塾入試

最近ではスーパーサイエンスハイスクール (SSH) などの高等学校においても課題探求型の授業が行われており、短期間の海外研修を体験した生徒も多い。大阪大学においても高校生の課題研究発表会を開催しているが、プレゼンテーション能力の非常に高い生徒も多い。昨年度からはスーパーグローバルハイスクール (SGH) に採択された高校もあり、英語による授業や社会的課題研究に取り組んでいる。さらに、今年度からは日本語で一部の授業を行う国際バカロレア (IB) 指定校も出てくる。SGH や IB 高等学校で課題研究を行った生徒が大学を受験するのが平成 29 年度からであり、大阪大学ではこの年に合わせて新たに「世界適塾入試」と名付けた総合的入学者選抜を行うことにしている。大阪大学のアドミッションポリシーでは、「確かな基礎学力及び主体的に学ぶ態度を身につけ、自ら課題を発見し探求しようとする意欲に溢れる人を受け入れます」と謳っているが、これまでのペーパーテストでは基礎学力や思考力を見ることはできるが、主体性や意欲を見ることは難しい。世界適塾入試では、センター試験で基礎学力を担保したうえで、高校学校におけるさまざまな活動を評価する総合的選抜により、学生定員の約 10% を入学させることにしている。そのために、グローバルアドミッションズオフィス設

けて総合的選抜方法の調査研究を行うことにしている。

マルチリンガルエキスパートプログラム

～旧大阪外国語大学との統合成果の第 2 ステージ～

大阪大学と大阪外国語大学の統合により、国立総合大学として初めての外国語学部が誕生した。外国語学部の学生は大阪大学のさまざまな学部教員による幅の広い授業を受けることができるようになった。一方、他学部の学生もさまざまな言語を学ぶことができるようになった。また、外国語学部とほかの学部の学生が同じ教室で学ぶようになって、教室の雰囲気も変わり質問をする学生が増えた。ここまでの統合の第一ステージであるが、今年度から外国語学部の学生が文系の他学部の授業を副専攻プログラムとして学ぶことができるようになった。また逆に、他学部の学生が外国語学部の学生と同じ高いレベルの外国語を学ぶプログラムが来年度からスタートする。標的にさまざまな言語 (25 言語) をおさめ他学部の専門性を身につけた大阪大学でしか育成することができない人材を、マルチリンガルエキスパートと呼んでいる。

大学改革の推進体制

教育プログラムや学修活動に係る抜本的な改革を企画立案し実行する新たな教学マネジメントの拠点「学修イノベーション機構」を平成 28 年に設置し、大阪大学がすでに有している部局の枠を超えた教育資源 (副専攻・副プログラム等) を生かし、「知の統合」に係る学修を多くの学生に効果的に提供する。また、大学全体の世界展開力を加速するため、研究交流、学生交流、海外調査・インターン、広報、産学連携等に係る既存組織の機能を整理統合して「国際戦略機構」を設立し、教育研究の国際交流やブランディング戦略の展開等を戦略的に推進する。